

浄相院
だより寿
光

第53号

平成23年7月1日

発行：浄相院
畑中芳隆〒332-0035
川口市西青木1-10-34
TEL 048 (251) 5984
FAX 048 (251) 5792

その日

住職 清響 芳隆

三月十一日東日本大震災のその日、あなたはど
うされていましたか？

私はその日西川口駅前地震に遭いました。深
く長い揺れが繰り返し繰り返してそのうち地割
れがするのではないかと思われました。ひとり
いたのですがまわりには人が集まってきて今や私
の運命もこの見ず知らずの人達と一緒になのかと感
じました。もしかしたらこれで終わりかもしれない
。妻や子どもや家族はどうしてる、もう会えな
いのかという想いがよぎります。なむあみだぶ・
なむあみだぶ・なむあみだぶ・・・ どうか
収まってくれ。まだ続いている、ほんとにもうだ
めか。その間どのくらいだったのでしょうか、やっ
と揺れが小さくなってきた。ああ助かった。しか
しその後の東北の惨状はこのときはまだ知る由も
ありませんでした。

その日はある檀家さんのお通夜の日でもありま
しました。

その女性はご生前、仕事を終えた後もボラン
ティアとして地域の清掃などにも尽くされた方
でした。お寺へもよくお参りくださり、その都度小
銭をまとめてお賽銭としてご奉納いただいたり、
石鹸、洗剤などお寺の掃除に役立ててほしいと
言っては自転車の荷台に品物を載せてお持ちくだ

さったのでした。今年に入って入院加療をされて
いましたが、亡くなる前日まできちんと食事を採
られていたということでしたので、ご親族はさぞ
ご無念だったと思われる。九十四歳でしたがそ
んなお歳を感じさせないような精力的な方だっ
たのです。

お通夜は板橋区の斎場でしたが、ひどい渋滞
で戸田橋の手前まで行き着きましたがすでに定
刻を過ぎようとしています。電話はどこにも通じ
ません。このまま車を運転していてもいつ橋が渡
れるのか見当もつきません。ただ確実に分かるこ
とは今、遺族の方は亡くなったその方と一緒に私
を待っているという事実です。どうかかして行か
ねばならない。私は車を置いて歩いて橋を渡るこ
とにしました。法衣の上にセーターを着込んでか
ばんを二つ持っています。出発。橋の歩道は人が大勢
行きかっています。がみな心なしかその表情はこわ
ばっているようでした。

ようやく斎場にたどり着いたころにはもう八時
近くだったかと思いますが、果たしてご遺族たち
はずっと待っておられたのでした。遅くはなりま
したがお通夜が始まりました。

自分がフラフラしているのか余震なのかわか
らない揺れが何度か来ましたが笑っているその方
の遺影の前にご回向出来てよかったなという思い
がこみあげます。法話の席ではもし今いらしたら
さっそく被災地に行つて役立ちたいと言うでしょ
うねというお話をしました。自分のことよりもま

ず他人のことを考える方でしたねとその方を偲び
ました。

その日以降の被災地からの報道でこのような方
が大勢おられることが判ってきました。住民を避
難させるために指揮をとった人、役所に、持ち場
に残ってひとりでも多くの人を逃がそうと使命感
をもった人、危険とは知りながらも家族を、知人
を探しに戻っていった人、こんな方々がご自分
の命と引き換えに他者を生かして自らは亡くなつて
いかれたのでした。その日、その時に苦境にあつ
た人たちを救うためにこの世に生を受けられたよ
うな気さえします。そのお姿は私たち衆生を救う
菩薩(ぼさつ)さまのようです。

私たちはそのような方々が必ず救われてゆく
世界があることを祈ります。そして今まさにその
方々は浄土(極楽)に生まれているのです。必ず
浄土(極楽)は存在します。私たちを待っていて
くれます。そこに行くために私たちは念仏をする
のです。こんな私でも阿弥陀さまのお救いの力だ
けは信じられるという気持ちが大変なのです。

いつ、どこで命尽きるのか？ 私たちにとつて
一大事です。少しでも長く生き、愛する者たちに
囲まれて、苦痛なく穏やかに逝きたいと誰しも思
います。少しでも自分の力で未来を拓いてゆこう
と考えます。しかし思い通りにはならないもので
す。そんなときふっと力を抜いて「なむあみだぶ
つ」と声に出してみましよう。いつでも、どこで
も私たちを救ってくださいる阿弥陀さまの大きな慈
悲のお姿にあらためて気づくことができると思い
ます。

七月・八月は盂蘭盆(うらぼん)の季節です。
皆様とご一緒に今回の震災の物故者のご冥福を、
被災された方々の一日も早い復興を念じてお十念
を申し上げます。

合掌